

筒井・松永争覇期における  
大和国在地武士の動向

Yamato - Samurais, 1559-1571

Katsuhiko SETA

勢田 勝郭

## 《I》 本稿の意図

一部に異説もあるが、三好長慶の家臣であった松永久秀が大和国に兵を進めたのは永禄二年のこととされている。以後、十八年後の天正五年十月十日に、彼が信貴山城において滅亡するまで、大和国内は筒井氏と松永氏との抗争の舞台となるのであるが、その間の在地勢力たる諸氏の動向について、私見では、従来通説とされてきた所の一部に疑問が存するので、それを披瀝し、以って諸先学の御批判を仰ぎたい。

## 《II》 筒井六郎の布施入城の記事をめぐる

筒井・松永争覇期の和国の状況を考える際の基本文献とされている『多聞院日記』の永禄八年十一月十八日の条には、

筒井六郎殿、布施城へ被入了。国中心替衆数多在之云々

という記事が見える。この記事について、三つのことを論じたいと思う。

## ① いわゆる「筒井城の戦い（第六次）」なるものについて

右の記事については、従来、筒井城が松永軍に急襲されたため、筒井六郎（藤勝、後の順慶）は已むなく筒井城を放棄、一族の布施氏を頼って布施城へ入ったものと解されてきた。その見解を最も明瞭、具体的に述べているのは、現在でも一般に広く利用されている『戦国合戦大事典 四』<sup>〔注1〕</sup>で、そこでは、その戦いを「筒井城の戦い（第六次）」と呼んで見出しを立てた上で、以下のよう記している。

この城が久秀軍の急襲を受けたのは永禄八年十一月のことである。……文字どおり、不意をつかれた筒井城は呆れるほど早く久秀の手に渡っている。順慶が慌ただしく落ちるとき、城を焼くゆとりもないほどだった。……命からがら城を落ちのびた順慶は……一族の布施氏の居城布施城を頼ったのが十一月十八日のことで、ここに腰を落ちつけた順慶は、反撃に備えてゆく。

また、『奈良県史』第十一卷<sup>〔注2〕</sup>でも、

同月十八日、久秀は筒井藤勝丸を筒井城に攻めて陥れると、藤勝丸は布施城に逃れて抗戦した。

と記されている(二三三頁)<sup>注3)</sup>。そんな中であって、最近、坂本雅史氏は、これ以降(勢田注：永禄二年八月六日の筒井落城)、筒井藤勝は椿尾上城を拠点に活動するが、同九年(一五六六)四月二六日に三好三人衆とともに筒井城奪還に向かい、三人衆の力を借りて和議により念願の奪還を果たすまで、筒井城へは戻っていないようである

と述べられ、「筒井城の戦い(第六次)」なるもの存在自体を否定する立場を明らかにされた<sup>注4)</sup>。私もまた、坂本氏と立場を同じくするもので、坂本氏の説が先に発表されている以上、問題提起の意義は既に薄れているのであるが、以後の論の前提として、自らの立場を確認する意味で、私なりに「筒井城の戦い(第六次)」なるもの存在を否定する根拠を箇条書にして整理しておきたい。

①『多聞院日記』をはじめとする同時代資料には、永禄八年十一月十八日、またはその少し前に、筒井城の周辺で合戦があったことを記すものは、管見の及ぶ範囲で皆無であること。

②同じく、永禄八年十一月十八日以前に、筒井順慶(当時は藤勝、以下、引用を除き順慶に統一)が筒井城に在城していたことを窺わせる資料も皆無であること。

③永禄八年十一月十八日前後の情勢は、松永久秀にとって非常に不利なものであり、軍勢力を筒井城攻撃に割く余裕はなかったはずであること。

①～③について、各個的に論ずるが、まず①は、単なる事実の指摘であるので、特に付加する所はない。各自、資料にあたって確認していただければよい。

②について述べると、前述のごとく松永久秀が大和国に兵をすすめたのは永禄二年のことであるが、その際、筒井氏(当時の惣領は順昭)が筒井城を放棄し没落したことは、『二条寺主家記抜萃』に、

永禄二年八月十日、松永彈正為大将、三好人数和州乱入。筒井・十市・万歳没落、越智出張。

とあることより知れる。従来の見解は、それ以後、弘治元年正月以降欠落している『多聞院日記』の記述が再開される永禄八年七月までの間に、筒井氏が筒井城を回復したという推定のもとに成立しているのであるが、永禄二年以後の松永久秀は、同四年正月、將軍義輝の相伴衆となり、同年中に奈良の眉間寺を

破壊してその跡に多聞山城を築造するなど、三好長慶の近畿一円支配と相俟って、ほぼ順調に大和国中地域の支配を強化しており、その間、筒井氏が筒井城を奪還したことを推測させるような状況は、私には考えられない。ということ、筒井城は永禄二年八月十日以降、一貫して松永方の手中にあり、その間、筒井の一族は縁故をたよりに各地に没落していたことになるであろう。既に坂本氏の指摘している所であるが、永禄七年、順慶の叔父であり補佐役であった順政が筒井城内ではなく堺で客死しているという『興福寺年代記』三月十九日の記事もまた、この説を補強するものであろう。

次に③について。右のごとく、ほぼ順調に大和国中地域の支配を強化していた松永久秀に最初の大きな危機がおとずれるのは、それまで協力関係にあった三好三人衆との対立が表面化したことであった。そして、その対立が決定的となったことを裏付けるのが、『多聞院日記』永禄八年十一月十六日の以下の記事である。

昨夕、三好日向・同下野・石成三人衆、千計にて飯盛城へ打入、長勝軒・金山駿河生害、則、左京太夫へ霜台ヲ可被見放之通訴訟、既に松弾トハ事切了。今明之間ニ此城へ四国衆可打入之由沙汰在之。

右の記事中、「三好日向・同下野・石成」というのは三好三人衆、「左京太夫」は三好義継、「霜台」「松弾」は共に松永久秀のことである。そして、それに引き続き、二日後の十八日に、最初に引用した「筒井六郎殿、布施城へ被入了」の記事が見える。この二つの記事は、やはり関連があると考えるのが自然であろう。では、関連があるとすれば、どのような関連か、それについて『戦国合戦大事典 四』は以下のように論じている。

『多聞院日記』によると、十一月十八日に城(勢田注：筒井城)を追われた順慶は布施城に入っているが、その前々日、つまり十六日には三好三人衆の軍勢(千人)が、久秀方が入った飯盛城を攻めていた。この城攻めは事実上、義継と久秀の手切れを世間に宣言したことになるが、飯盛山城攻めに精銳をさいたため、結果的に主力に不足が生じたのは事実で、敏感にその間の事情を汲んだ久秀が、手薄の筒井城を襲ったものである。

なるほど、「筒井城の戦い(第六次)」なるものが実際にあったと考えた上で、二つの記事を関連付けようとするなら、このように考えるより仕方あるまい。しかし、率直に言って、うがった(苦しい)説明であるとは、誰しもが抱く感

想であろう。「筒井城の戦い（第六次）」なるものの存在にこだわりさえしなれば、永禄二年八月以来、本拠の筒井城を松永方に奪われていた筒井氏が、雌伏六年余、三好三人衆が宿敵・松永久秀と離反したという機を捉えて（あるいは、三好三人衆と反松永連合を組むことを事前に示し合わせた上で）、筒井城奪還の拠点として布施城に入城したと、素直に無理なく考えることができる。

## 〈2〉高田氏・布施氏の動向

『多聞院日記』永禄八年十一月十八日の記事中の「筒井六郎殿、布施城へ被入了」という記述の意味する所が右のようなものであるなら、では、それに続く「国中心替衆数多在之」という記述はどう理解されるべきであろうか。従来、この記述は「筒井城の戦い（第六次）」における筒井氏の敗北によって、松永方へ「心替」する者が多かったというように理解されてきた。そして、そのような「心替衆」の代表として挙げられてきたのが高田氏であった。それは、例えば、『戦国合戦大事典 四』の、

このころ、順慶を見限り、ひややかに久秀に寝返った諸将があったのは自然のなりゆきというものであった。その中には、文正、応仁以来、百年間にわたって筒井氏と命運をともにしてきた高田氏がいた。当時、離合集散はときのつねであった。

というような記述に、もっとも端的に示されている。同旨の見解は、それ以後の刊行である『大和高田城物語』<sup>〔註5〕</sup>中の、

高田氏も筒井氏の見方として多くの功績があったのですが、松永久秀の勢力が強まるにつれて筒井順慶をみかぎったのです。筒井順慶は筒井城を追われて布施城に逃れました。（九二二頁）

という記述にも継承されている。

しかし、『多聞院日記』等の同時代資料に、この時点での高田氏の寝返りや裏付ける記述は、管見の及ぶ所どこにも存在しない。ただ、『多聞院日記』永禄八年十一月二十日の条に、

高田郷大略布施ヨリ焼払了。

という記事が見え、筒井順慶の布施入城後、布施氏と高田氏が敵対関係になっていることが知れるので、それは「筒井城の戦い（第六次）」の筒井氏敗戦の

結果を見て、高田氏が松永方に寝返ったのが理由であろうと推測されているみである。

しかし、先に論じたごとく「筒井城の戦い（第六次）」なるものは存在せず、「筒井六郎殿、布施城へ被入了」の記事が、筒井氏の敗戦ではなく、筒井城奪還のための拠点構築を意味するものであるなら、この時点で筒井方から松永方へ寝返る者が生ずるとは考えにくい。布施氏と高田氏の対立は、高田氏の筒井方から松永方への寝返りではなく、布施氏の松永方から筒井方への寝返りによって生じたものと考えるべきであろう。その考えを補強するのが、『多聞院日記』永禄八年十二月二日の条の

布施ノ人質ヲクシニ指、浅猿々々。

という記事である。表面的に意味する所は、布施氏が高田郷を焼き払ったことへの報復として、奈良（松永方）にいた「布施ノ人質」が串刺しにされたということである。では、何故「布施ノ人質」が松永方にいたのか。人質というのは、同盟関係がある所で、関係の担保として、同盟関係内の弱者から強者へ送られるものである。従って、同盟関係が破れ、修復不可能と判断された時、人質は意義を失い、殺害される。ここで「布施ノ人質」が殺害されたということは、その裏を言えば、松永氏と布施氏との間には松永氏優位の同盟関係がそれまで存在していて、この時点で布施氏の寝返りによって、その同盟関係が破れたことを物語るものであろう。

## 〈3〉郡山向井氏等、郡山衆の動向

永禄八年十一月十八日の筒井順慶の布施入城をめぐる大和国在地武士の動向に関して、従来の説が誤っていると思われるもう一点は、郡山向井氏等、郡山衆についてのものである。『多聞院日記』永禄八年十二月二十日の条には、

郡山向井、大安寺・辰市へ人数を出、色立心替了。

という記事が見える。この記事についての従来の見方は、

反面、郡山向井衆が松永方に寝返るといふ動きもあった。<sup>〔註6〕</sup>

というものであるが、三好三人衆との対立が決定的となり、筒井順慶が筒井城奪還の拠点を築き、布施氏や井戸氏が人質を犠牲にしてまで筒井方に寝返るといふ状況下で<sup>〔註7〕</sup>、つまり、大和乱入以後、松永方にとって最も不利な状況下

で、わざわざ松永方に寝返ることは常識的に有り得ないであろう。郡山向井氏の大安寺・辰市への出兵もまた、やはり松永方から筒井方への寝返りであったと私には考えられる。この記事の約半年後、『多聞院日記』永祿九年六月一日の条には、

巳刻、於大安寺南大門ニ、郡山衆ト多聞山衆ト行合、一戦在之。

という記事が見えるが、これも、永祿八年十二月二十日以降、郡山衆が筒井方であったことを窺わせるものであろう。

右のごとく、永祿八年十二月二十日の郡山向井氏による大安寺・辰市出兵が松永方から筒井方への寝返りであるなら、その二か月前、『多聞院日記』永祿八年十月八日の条の

当国、秋山・小夫、多武峰と申合、色ヲ立了。山中ニハ山田出張云々。

「昨今、奈良中のびしのび二物を隠了云々。南へ郡山・超昇寺出陣了。」という記事も、見方の変更が求められよう。従来の見方は、

秋山・小夫両氏は多武峰と申し合わせて松永攻略の準備を進め、山田某は東山内に、郡山衆や超昇寺衆は南に、それぞれ出陣して、多聞山城の包囲体制を調えた。(注)

というもので、同様の見解は、最近刊行された『筒井城総合調査報告書』にも継承されているが(三五頁)、右に論じたごとく、永祿八年十二月二十日以前、郡山衆は松永方であったのだから、山田氏等と多聞山城包囲の一環となることは有りえない。そもそも、地理的にも多聞山城は郡山より北にあるのだから、南へ出陣するのは方向違いである。「南へ郡山・超昇寺出陣了」の意味は、松永方に叛旗を翻した秋山・小夫・多武峰を鎮圧するために、松永方として出兵したものと考えねばなるまい。時期は下るが、『多聞院日記』元龜元年六月十日の条に、

当国乱入之本願ハ辰巳・超昇寺也。

という記述が見え、これによって、永祿二年の松永久秀の大和国乱入に際し、国内で率先して松永方となったのは、郡山衆の一員たる郡山辰巳氏と超昇寺氏であったことが知れ、両氏は、松永氏にとって在地武士中でも最も信頼できるものとして、同盟関係にあったと考えられる。その郡山衆が永祿八年十二月二十日に筒井方に寝返り、大安寺・辰市に出兵したことは、大和国内の情勢を筒井方優位に一変させる事件であったのではないかと私には思われるのである。

### Ⅲ 辰市合戦をめぐる郡山衆の動向について

大和国における筒井・松永の争覇戦の分水嶺となったのが、元龜二年八月四日の辰市合戦であることは既に定説化しており、私もその点に異論はない。ただ、その合戦の実態については、現在も後代の資料によった理解が一部流布しているため、同時代資料たる『多聞院日記』と『二条宴乗記』の記述を素直に読み解くことによって、その実態を再構築してみたいと思う。

周知のごとく、辰市合戦のきっかけは、筒井方が、多聞山城からは南南西約四キロ、郡山城からは東北東三キロ余、筒井城からは北北東五キロ余に位置する万葉以来の歌枕の地である辰市に城砦を築いたことで、それは、『多聞院日記』元龜二年八月二日の条に、

辰市ニ筒ヨリ用害沙汰之。多聞ヨリ人数雖出之、無曲打掃了。

と記されている。本格的な衝突は、その二日後、八月四日の出来事であるが、それについての『多聞院日記』の当日の記述は以下のとおりである。

從信貴城、久秀・河州大夫殿人数同道ニテ、今日午刻ニ於大安寺著陣、昨日辰市ニ捨タル城へ取寄、酉刻上刻ニ及一戦。筒井・郡山両方ヨリ後詰沙汰、城州敗軍了。(下略)

経過を箇条書きにして整理すると、

- ①元龜二年八月四日、松永久秀は、三好義継の軍と連合して信貴山城を出発した。
- ②その日の午刻、目標である辰市からわずかに東に振れた北方一・二キロにある大安寺に着陣、攻撃態勢を整えた。
- ③戦闘は約五時間後の酉上刻に始まった。

④松永・三好連合軍が辰市を攻撃している背後を筒井勢と郡山勢が襲撃、挟撃される形となった松永・三好連合軍は敗れた。

というところで、勝敗の帰趨を決めたのは、筒井・郡山両勢の背後攻撃(後詰沙汰)であった(注)。では、辰市合戦以前の郡山衆の動向はどのようであったのだろうか。

辰市合戦以前の郡山衆の動向について、従来の説の基本とされてきたのは『日本城郭大系』第十巻の「郡山城」の項の以下の記述である。

永禄十一年（一五六八）に筒井落城、元亀元年（一五七〇）に井戸落城ののち、郡山城だけが筒井方によって死守されるようになり、……ついに持ちこたえ、同二年八月、筒井の主力軍が当城に集結して発進し、辰市城合戦で松永軍を打ち破った。

この記述は「郡山衆」の動向を直接述べたものではなく、「郡山城」の帰属について述べたものであるが、郡山城は即ち、その地の在地武士たる郡山衆の本拠たる城であるから、郡山城が一貫して筒井方の手にあったということは、郡山衆もまた一貫して筒井方であったということを述べていることになる<sup>〔註10〕</sup>。しかし、『多聞院日記』永禄十一年十月五日の条には、

一、松少、昨日上意并織尾へ礼在之。和州一国ハ久秀可為進退云々。

（中略）

一、郡山向井、松少へ又帰參了。当国大天魔也。

という記事が見え、この記事から、先述のごとく永禄八年十二月二十日の時点で筒井方に寝返った郡山向井氏が、織田信長が大和国の支配権を松永久秀に認めたことをうけて、ここでまた松永方に寝返ったことが知れる。そして、次の六日には、

一、松右人数、筒井郷へ打出、平城ノ際迄焼了。郡山衆裏帰故也。一国之体、抑いか、可成行哉。無端々々。筒井順慶、堅固ニ籠城ト云々。行末ハ難成事也。

という状況になり、更に二日後の八日には、筒井順慶は、永禄九年六月八日に奪還して以後<sup>〔註11〕</sup>、二年四か月にわたって保持してきた筒井城を、再度放棄せざるを得なくなる<sup>〔註12〕</sup>。つまり、永禄十一年十月八日の筒井落城の直接の契機は、郡山衆の松永方への寝返りであったのであり、郡山城が永禄十一年の筒井落城から辰市合戦まで一貫して筒井方の手にあったとする従来の見解は、その最初からして誤りであると言わねばなるまい。

しかし、先に示したごとく辰市合戦では郡山衆は明らかに筒井方として行動しているのであるから、その間のどこかで、郡山衆はもう一度筒井方に寝返っていることになる。それはいつのことなのであろうか。

筒井・松永争覇期における郡山衆の動向を考える上で、重要でありながら、従来ほとんど検討されずに過ごされてきたものとして私が挙げたいのは、『多聞院日記』元亀元年六月十四日の条に以下のごとく記されている事件である。

一、今朝、山中ニテ、郡山衆大旨城州ヨリ令生害了。堀池・平等坊・室・豊井、此外内衆五六十モ討殺了。則時ニ郡山へ打寄散郷悉焼之。城は先々拘之。……如今者城モ不審々々。

記事の内容は、「元亀元年六月十日の朝、山中（東山内）において、郡山衆五六十人が、城州（松永久秀）によって殺された後、松永軍は郡山城へ攻め寄せ、付近の散郷を全て焼いた。郡山城はとりあえず何とか持ちこたえているが、この様子だとうなるかわからない」というものである。この事件はまた、『二条宴乗記』では、

十四日……山中深川陣ニテ郡山衆打取被申也。平等坊・堀池・同新衛門・豊井、其外付之者共四十人斗打取被申也。其日則郡山へ被懸取也。竹下陣所ニテ被打取由。

と記されている。

最初に持たれる疑問は、郡山衆が何故大挙して、本拠たる郡山を離れて東山内にいたのかということであるが、その八日前から開始された福住城の攻防戦<sup>〔註13〕</sup>に加わっていたというのが、常識的に考えられる答であろう。では、郡山衆は福住城攻防戦に筒井方として加わっていたのか、それとも松永方として加わっていたのか。『奈良県史』第十一巻では、

郡山衆は東山内て悉く生害させられた。同衆は久秀の大和侵入に際しては超昇寺とともに松永方となったがその後筒井方に裏返っていたものである。

と述べられているが（二三六頁）、郡山衆の動向がそんなに単純なものではなかったことは、既に見てきたとおりである。もし郡山衆が筒井方であったのなら戦死、松永方であったのなら処罰ということになるが、郡山衆ばかり四十〜六十人が一日の朝の中に生害されるというのは、戦闘によるものとしては極めて不自然であると私には思われる。一方にこれほどの戦死者が出るほどの戦闘なら、当然戦った相手にも戦死者が出るであろうし、負傷者や没落者の情報もあるはずである。この事件はやはり、筒井方への内通等、許しがたい情報が松永久秀（城州）のものにもたらされ（その情報が事実であったかどうかは、この場合問題にならない）、その結果、十日朝、郡山衆は一斉に捕縛（または包圍）され、抵抗できない状態で一挙に殺害されたというのが最も自然な推測ではあるまいか。『多聞院日記』に「城州ヨリ令生害了」とあるのも、戦闘による死よりも、松永久秀の命令による処刑を推察せしめる表現であるし、『二条宴乗

「記」には「竹下陣所にて被打取由」とあって、事件の場所が松永方の武将である竹下（竹内下野守秀勝）の陣であるのも、その推察の蓋然性を高めるものであろう。更に、引用は省略したが、『多聞院日記』によれば、人質にとられていた郡山辰巳の孫（次男ナリケ子息）が同時に殺されているのも、裏を考えれば、郡山衆がこの時点まで松永氏と同盟関係にあったことを示す事実であると私には考えられる。

そして、その日のうちに、松永軍が郡山城を包囲したのは、『多聞院日記』に「則時二郡山へ打寄、散郷悉焼之」、「二条宴乗記」に「其日則郡山へ被懸取也」と記すとおりである。そして、この日以後、辰市合戦までの間の郡山衆の動向を窺わせる記事を『多聞院日記』『二条宴乗記』からすべて列挙すると以下のごとくである。

- ①郡山表へ礼二御出。北大・進左・我等、竹下にて大酒。  
〔二条宴乗記〕元龜元年六月十七日
- ②松城父子、郡山衆在陳見舞下向了。父子へ糲袋、竹下へ一荷、新織へ一樽、林若へ扇一本遣之。押城四方に用意也。<sup>〔注15〕</sup>  
〔多聞院日記〕元龜元年六月十八日
- ③郡山城ヨリ父子帰陳了。  
〔多聞院日記〕元龜元年六月二十六日
- ④城州京へ被上。金吾ハ郡山表陣向也。  
〔二条宴乗記〕元龜元年六月二十七日
- ⑤於郡山表、不慮二一戦、サキノ宮・タテリ・ムキキ以下、数多手負了。  
〔多聞院日記〕元龜元年八月九日
- ⑥福住別所二筒井陣取被申由。……夕、又郡山衆罷出、辰市を焼。  
〔二条宴乗記〕元龜元年八月二十日
- ⑦夜前四時二池田豊後守鳥見知行。リヤウセン寺ニ為所務居被申所へ夜打仕。……郡山へ引由。郡山衆二百斗參由。  
〔二条宴乗記〕元龜元年九月二十九日
- ⑧郡山付城、田中表、タカヤマ・山崎持口を、山崎お、と甚五郎、タカ山を夜打取。郡山へ入。其城郡山人數入了。  
〔二条宴乗記〕元龜元年十月二日
- ⑨郡山表へ、城州見廻ニ參。  
〔二条宴乗記〕元龜元年十月五日
- ⑩昨日、郡山衆・越智衆・箸尾其他南方衆參会之由。筒井ニハ申事候て、不被出由。  
〔二条宴乗記〕元龜二年六月十七日
- ⑪葉山、郡山付城を居取申。ハママ持申候城也。筒よりも人數出由。

〔二条宴乗記〕元龜二年七月五日<sup>〔注15〕</sup>  
⑫奈良中人夫百人にて、郡山付城へ兵糧被入了。

〔二条宴乗記〕元龜二年七月十四日  
一部、私には意味の取りづらい記述もあるが、郡山城が松永方に包囲されて以後、

(1) 多聞院英俊や二条宴乗が早速、郡山表の松永方の武将に在陣見舞いをしたこと。

(2) 郡山城の包囲のために、松永方が付城を四つ築いたこと。

(3) それでも郡山城は落城せず、かえって、そこから辰市や靈山寺にゲリラ的な攻撃がなされたこと。

(4) 付城四つのうちの二つで、寝返りがあったこと。

(5) その間、郡山、越智、箸尾等の間に筒井方としての連合が成立していたこと。

などが窺える。これらは、全て元龜元年六月十四日以降、郡山衆が筒井方であったことを物語るものである。

では、元龜元年六月十四日以前はどうであったのかというと、『二条宴乗記』に以下のごとき記述が見える。

飯高進官事二、春良かたらひ、郡山へ下る。  
〔元龜元年三月晦日〕

郡山より、飯高、米五斗上被申候。壱石分、両度ニ相濟。  
〔同年四月七日〕

事件の二月半前、飯高の進官の件で郡山に下り、その応答として七日後に郡山から米五斗が送られてきたという内容であるが、ここに取りあげられている「飯高進官事」については、その約四か月前、『二条宴乗記』永祿十二年十二月七日の条に、

郡山辰巳殿へ、飯高・北暮我進官、岡崎進官之儀も折紙を遣也。同、飯高進官事二堀池へも遣。

という記事が見え、郡山辰巳や、先の引用のごとく元龜元年六月十四日の事件で殺されることになる堀池が一役を果たしていたものであったことが知れる。当時、松永方と筒井方は井戸城をめぐる激しい攻防を繰り返しているのが、これらの記事は、そのような状況下において、郡山辰巳や堀池と松永方との関係が、まだ平和的なものであったことを物語っていると私には考えられる。それ以前にも、永祿十一年十月以降、二条宴乗周辺の人物が、郡山と奈良

の間を往来している記事は『二条宴乗記』には枚挙に暇のないほど見えるが、そのような記事は、元亀元年六月十四日以降には全く見えなくなり、そこに大きな状況の変化が看取されよう。

#### 《Ⅳ》まとめ

以上、言及した布施氏・高田氏・郡山衆について、本稿の結論として「まとめ」しておく。

##### 〈布施氏〉

▽松永久秀の大和乱入以降、松永方であったが、永禄八年十一月に松永久秀と三好三人衆が対立したことをうけて、筒井方となり、没落中であった筒井六郎（順慶）を布施城に迎える。この裏切りによって、松永に出されていた人質が串刺しにされた。

##### 〈高田氏〉

▽松永久秀の大和乱入以降、松永方であったことは布施氏と同様であるが、永禄八年十一月以降も松永方に止まり、布施氏の攻撃を受けたが、以後も松永方に止まり続けた。

##### 〈郡山衆〉

▽松永久秀の大和乱入に際し、率先して松永方として行動した。  
▽永禄八年十月の秋山・小夫の反乱に対しては、松永方として、鎮庄のために出陣した。

▽同年十一月、松永久秀と三好三人衆が対立したことをうけて国内の武士が次々に筒井方となる中、松永を寝がえり、大安寺、辰市に出兵した。  
▽永禄十一年十月、織田信長が大和国の支配権を松永久秀に認めたという状況下で、再度松永方となり、それが直接の契機となって、筒井順慶は筒井城を放棄せざるを得なくなった。

▽元亀元年六月、東山内で郡山衆四十〜六十人が松永久秀によって殺されて以後、再度筒井方となり、元亀二年八月の辰市合戦で松永・三好連合軍を奇襲し、勝敗を決定づける役目を果たした。

#### 《付》『二条宴乗記』の年月未決部分の特定

『多聞院日記』と並んで、筒井・松永争覇期の同時代資料として重要な『二条宴乗記』には、現在まだ年月不詳とされる部分が残されているが、本稿執筆の過程で、その記事内容を『多聞院日記』等と比較することにより、それらの部分の年月が特定できたので、稿の余滴として、ここにその概略を記しておきたい。

「二条宴乗記補遺」<sup>〔注6〕</sup>において、時日未特定として翻刻されているのは、天理図書館蔵本の第一冊の次の三部分である。

- ① 年不詳（永禄十一年以前） 十月……七枚
  - ② 年月不詳（永禄十一年以前） ……九枚
  - ③ 年月不詳（永禄十一年以前） ……一枚
- ②と③は、翻刻では一連のものとされているが、途中に闕丁があり、私見では、その後で二つに分割すべきものである。

以下、結論とその根拠を述べる。

①は永禄十二年十月十一日から同晦日までである。十三日の記事中に「信長出京間、為見廻、金吾今日早天より上洛」とあるが、これは『信長公記』巻三末尾に「十一日御上京。勢州表一國平均に仰付られたる様体、公方様へ仰上げられ、四五日御在洛候て、天下の儀仰聞けられ、十月十七日、濃州岐阜に至て御帰陣」<sup>〔注7〕</sup>とあるのに対応するものと推測される。これらは永禄十二年のことである。翻刻は永禄十一年以前と推定しているが、十三日の記事中、松永久秀を「城州」と記しており、『二条宴乗記』で、久秀の呼称が「霜台」から「城州」に変わるのは永禄十二年四月二十四日のことであるから<sup>〔注8〕</sup>、これは、それ以前の記事ではありえない。更に、天候記事で十九日に「四時より雨降」とあるが、永禄十二年十月十九日の降雨は、『多聞院日記』にも記されており、矛盾は生じない。

②は、①に続く永禄十二年十一月朔日より同二十三日までである。天候は、十六日までは全て「天晴」で、十七日に「夜明がたより雨下」、十九日に「天晴……雪少ちる」、二十一日に「雪降つもる也」とあるが、『多聞院日記』永禄十二年十一月には、十七日に「雨下了。此三三日毛雨不下」、十九日に「雨

下了」、二十日に「及晩あられふる」、二十一日に「卯刻ヨリ大雪二下」とあって、十九日の「雨」と「雪」の相違を除いて全て一致している。

③は、①の前に来る永禄十二年十月朔日から十日までである。井戸表で戦いが継続していること、その間、全く降雨がなかったらしいことが記事より知れるが、それらは『多聞院日記』の当該期間の記事と矛盾しない。

以上、諸先学の御叱正を願う次第である。

(注1) 藪景三著、一九八九年、新人物往来社。

(注2) 朝倉弘著、平成五年、名著出版。

(注3) この解釈の先蹤は、管見の及ぶ所では昭和五五年に刊行された『日本城郭大成』第十巻の「筒井城」の項の記述で、ここでは「筒井城は、同八年十一月に落城」と記されている。

(注4) 「筒井城総合調査報告書」(大和郡山市教育委員会・城郭談話会編、平成十六年三月、大和郡山市教育委員会発行) 八〇頁。なお、同旨の見解は、既に氏の主宰するインターネット歴史サイト「戦国浪漫」において、それ以前から述べられていた。

(注5) たかだ歴史文化叢書編集委員会編、一九九四年九月、大和高田市役所発行。

(注6) 『奈良原史』第十一巻、二二三頁。

(注7) 布施氏については既述、井戸氏については、『多聞院日記』永禄八年十二月十五日の条に「今暁、井戸方色ヲ立、古市郷焼了。雨下、無殊儀。扱も人質女子実子也、又クシニサスベシ。浅猿々々」という記事が見える。

(注8) 『奈良原史』第十一巻、二二三頁。

(注9) 『二条宴乗記』の同日の条には「城州、信貴より若江人数引クミ、辰市城へ取ツメラレ候。金山タキシヤウ、郡山衆ウシロツメニ出、多門より金吾各被出。陣クヅレ大勢打死」とあり、勝敗を決定つけた後詰の戦力として郡山衆のみがあげられており、郡山衆の果たした役割の大きさが推察できる。

(注10) 例外として考えられるのは、郡山衆が松永方として没落している場合であるが、勿論そのようなことを窺わせるような記述は、『多聞院日記』にも『二条宴乗記』にも見えない。

(注11) 当日の『多聞院日記』に、「筒井平城……相拘之処、今日嘸ニテ落城了。午刻二筒井六郎入城云々」と有り。

(注12) 『多聞院日記』永禄十一年十月九日の条に「昨夕筒井ノ平城落了。今朝早々松右被打出了」と有り。

(注13) 『多聞院日記』元龟元年六月六日の条に「松城父子……父子共二福住城へ取寄了。……以上四千ほど在之」とあり、松永方は、四千の大軍で、東山内における筒井方の拠点であった福住城を攻撃していた。四千という兵力は、先に触れた永禄八年十一月に三好三人衆が飯盛城を攻撃した時の兵力の四倍であり、非常な大作戦であったと私には思われる。福住城の所在は未決であるが、現行行政地名で天理市福住にあるのは確実。郡山衆が殺された「深川陣」は、山辺郡都祁村上深川または下深川であろう。両地の間は直線で約七キロである。

(注14) この記述は、このままでは松永父子のために郡山衆が在陣見舞に downward したという意味になるが、そんなことは有りえない。多分「郡山衆」は「郡山表」とあるべきを、書写の際誤ったものである。

(注15) 同日の『多聞院日記』には「昨夜、山中ノハヤマト簀川ト持タル郡山ノ付城ニテ、ハ山裏帰テ、ス川衆廿人計討取了」と有り。

(注16) 天理図書館紀要『ビブリア』第六〇号、昭和五〇年六月。

(注17) テキストは角川文庫本(昭和四四年)による。

(注18) 二十四日の記事中に「近日は霜台、山城守と申」とある。なお、『多聞院日記』では、それ以前、七日の記事中に「多聞山へ礼二出了。松城へ廿疋」云々とある。